

＜人がいて音楽が生れる～～「酒屋唄」に象徴される日本の音楽の特性～～＞

2004年3月21日朝日酒造研修室（三島郡越路町）

茂手木潔子（上越教育大学芸術系音楽）

朝日酒造主催「朝日日本酒塾 2003」

1. 海外から見た作業唄の独自性・日本の唄の印象

「どこへ行っても、都会の町々の騒音の中に、律動的な物音があるのに気づく。日本の労働者たちは、働く時は唸ったり歌ったりするが、その仕事が、叩いたり、棒や匙でかき廻したり、その他の一様の運動である時、それは音調と律動を以って行なわれる。・・・中略・・・。労働の辛さを、気持ちの良い音か拍子かで軽めるとは、面白い国民性である」（Edward Sylvester Morse 1838-1925）平凡社『日本その日 その日3』p.113

「田舎者の表情、絶間なく我鳴りたてる老婆——それ等は実に完全に表現され、皆を笑わせた。異なった声の真似が、実に強く、そして即座になされるので、目を閉じていると三人の、別々の人が話をしているように思われる」（ibid : 183）

「役割に適した、奇妙な咽喉声や、短い音や、キーキー声や、啜泣の音や、吃驚したような叫び声に至るまでを含む」（ibid : 184）

「三味線もまた、絃を振動させながら指を上下に動かすことによって、漸強音、啜泣、突発的な調子、気味の悪い調子等、あらゆる音を出すので」（ibid : 184）

2. 仕事唄の役割と特徴

「酒屋唄」 & 「唄半給金」

1) 時計のない時代、唄を歌うことによって時間を測った。（唄は時間の測定に適している）

攪拌時間の測定には、唄が役に立ったと言う。東海道の宿場を順番に詠み込んだ歌詞や中仙道の宿場町を詠み込んだ歌詞が伝えられていて、「今日は東海道のどこどこまで」という杜氏の指示によって、攪拌時間が決められた。

2) 集団作業を揃えるために、唄は有効に機能した。

この点については、特に説明を施すこともないであろうが、酒屋唄の場合、酒の^{もと}酏の攪拌の精度を高めたり、米の磨ぎ具合を揃えるために動きを揃えることが重要で、唄が動きを揃えるのにとっても役に立った。

3) 唄の歌い方で仕事の精度を判断することができる。歌い方によって、身体の力がうまくは入ったり入らなかったりするので、力強く歌っている時には



桶も良く洗えるから。

- 4) 共同体の確認のため
- 5) 蔵の責任者が蔵日との作業状態を確認するため
- 6) 娯楽として
- 7) 技能出稼ぎの辛さを軽めるため
- 8) 発酵の促進のため (?)
- 9) 歌として
- 10) 繊細な感性の育成のため

3. 酒屋唄に現れた日本音楽の様々な特徴

1) 唄の揃え方

酒屋唄は、旋律優先ではなく遠くまで届かせるための声量、動きの一致のための拍子が優先される唄であるから、旋律の少しのずれは何ら支障がない。

2) 唄の拍子の取り方

酒屋唄の中には、通常の4拍子のような、強・弱・中強・弱という拍の捉え方はない。とろとろした酒の酛に長い櫂棒を差し入れるのであるから、引っ張り上げる時はかなり力が必要である。だから、3拍目と4拍目の間は拍子が伸びることになる。仕事の経験がなく唄だけを習った蔵人の唄には、この拍の伸縮がない。

3) 歌うたびに歌詞が変わっても良い。

「寒い」「眠い」「辛い」酒造業の世界。いつも体裁の良い歌詞ばかり歌ってられない。時には、眠気が生死に影響することもある。男社会の蔵の中、卑猥な歌詞もあるし、こっけいな歌詞もある。歌詞は無礼講でよいのだから。それでこそ、生きている証しなのである。歌い手はそれぞれに歌詞を作ったり、先輩の歌った歌詞の一部を変えたりする。

4) 先導役がまず歌い出し、その後他の人が付いて行く歌い方をする。

音頭一同形式と言われるこの方法、日本音楽すべてに共通する。

5) 「唄」と名前がついているのに、旋律的でない。そして、歌う人によって同じ歌でも旋律が違っている。

6) 酒屋唄には楽譜がない。



7) 始まりも終わりも、音頭役の指示によって決められる。

「ここらでチョイト」「長煙草」とか休憩を表わす歌詞を挿入すると、この歌詞が唄を終止へと導く役割を果している。

8) 旋律的に歌う唄、「数番唄」という数を数える唱え事のような様式の「唄」、春日大社の警蹕に似た、早朝に蔵人を起こす「総起(そうおき)」の声など、日本の様々な声の扱いが酒屋唄には入っている。

3. 身度尺で測られる音楽

「人間の体で測って物を作ることは、昔はどここの国にもあったつくり方だったといわれています。日本の言葉ですと、これを「身度尺^{しんどしゃく}」というのですけれども、メートル法のセンチメートルは身度尺ではないのです。体を物差しにしているいろいろなものを測ってゆく、あるいはまた物をつくっていく、そういうときに使う物差し、あるいはそういう物差しの使い方、これを「身度尺を使う」あるいは「身度尺で測る」といいます。日本の見度尺は何であるかご存知ですか。・・・中略・・・これは大きなスケールと小さなスケールがありまして、小さい方のスケールは指を直角になるようにひろげたときの親指の先と人差し指の先端を結んだ直線を物差しにします。これは「咫^{あた}」といっています。」(秋岡 1981 : 126 - 127)

- 1) 唄のフレーズは、息の長さで深く関係する。
- 2) 非拍節的な唄の旋律の特徴として、下降旋律を描くことが多い
- 3) ジャンルの確立は、演奏者それぞれの音楽表現の違いによってきまる。
- 4) 人がそれぞれ異なるように、楽器も様々である。
- 5) 仲間の息を感じ合うアンサンブル

5. 手を入れながら造りつづける音楽

「日本の景色は一応田んぼがきちんとなってるように見えますけど、きちんとなっていること自体が地形に合わせていますから、ほかと全く違う世界だと言うことが分かるんですね」「自然って、日本では丈夫でしたから、人間はその中に自然のまま住んでいるわけにはいかないんですよ。白神山地には住めません。これを努力して何とか人工の上に戻らせてくる。自分の都合のいいように。この努力を「手入れ」という。自然をほっておくと自然のままになってくる。だからそれに手を入れて自分が使えるようにする。手を入れてるから自然はあるんです。」(茂手木 2001 : 86 - 87 養老猛司氏の言葉より)

6. スローフードならぬスローミュージックの提唱

プロセス重視の価値観の再評価

プロセスの中から思考は生まれ、技が育つ

身体性の回復と、常に変化し続けることを肯定する価値観

引用資料 (引用順)

1. E. S. モース 石川欣一訳『日本その日その日3』平凡社 東洋文庫 171 平凡社 1970年

(1994 年代 23 刷)

2. 秋岡芳夫「生活と身体で測る」講談社ゼミナール選書『日本の知恵と伝統 生活の中のデザイン』講談社 1981 年
3. 茂手木潔子「音具から楽器へ 音から音楽へ」西潟昭子監修『日本音楽のち・か・ら』音楽之友社 2001 年